

ハイブリッド自走クレーン

加藤製作所、燃費40%低減

加藤製作所は世界初のハイブリッド式ラフテレーンクレーンを開発した。燃料消費を従来機種と比べて最大40%低減できる。脱炭素社会の実現に向けて建設機械の電動化は喫緊の課題。カーボンニュートラル（温室効果ガス排出量実質ゼロ）の潮流を受けて建機のハイブリッド（駆動装置）が多様化する中、選択肢の一つとしてハイブリッド式を新たに提案する。8日から国内向けに受注活動を開始し、5年間で100台の販売を目指す。

加藤製作所が開発した「T」。2025年2月には、運転席とクレーン操縦席が一体の25トンドラフテレーン「SR-250 HV+EK-UNI」から。競争力のあ



いう。主動力はディーゼルエンジンで、補助用に電動モーターを搭載。バスなどでの実績の多いハイブリッド式は、燃料消費を従来機種と比べて最大40%低減でき、環境負荷を抑制できる。

ブリッドシステムを採用した。走行時は従来のディーゼル式に比べて20～40%の燃料と二酸化炭素（CO₂）の削減を実現する。アイドリングストップ機能も備える。電動化技術で環境負荷を抑えた。重量は普通、電池を載せる分増えているが、より強度の高い材料を使うなど、車両の軽量化を同時に進めることでディーゼル式とほぼ同程度を実現した。茨城工場（茨城県五霞町）で生産する。

また、外部電源油圧ユニット「EK-UNIT」が付属する。工場などの作業現場にある電源とクレーンをつなぎ、エンジンを止めて電気のみでクレーン作業が可能になる。太陽光や風力由来のグリ

ーン電力を活用すれば、作業時のCO₂排出量を最大で実質ゼロにできる見込み。同社は主力の25トンドラフテレーンを皮切りに、ハイブリッドシステムの横展開も検討する。